

メッセージアウトライン 創世記12:10～20「最初の試練」

[10]「その地に飢饉が起こったので、アブラムは、エジプトにしばらく滞在するために下っていった。その地の飢饉が激しかったからである」

神のみことばに従って信仰を持って一歩踏み出したアブラム。彼は自分に現れてくださった主のことばにより、カナン地のこそ、主が自分に与えてくださった地であることを知った。そして彼はそこに主を礼拝するために祭壇を築いた。シェケムの地、またベテルの東の山地でも祭壇を築いた。(7~8)

彼は天幕を張るとともに祭壇を築いた。彼は生活のことに委ねて神を礼拝することをおろそかにしなかったのである。彼は神を信頼して新しい歩みに踏み出したので、当然神を礼拝し、神の導きに従うことを第一としたのであろう。しかし、彼の信仰は、その旅と同じく、まだまだ成長途上であった。ここで彼は最初の大きな試練に会うことになる。

アブラムの一行は家畜のえさを求めて、カナン地の南部のネゲブの地まで来ていた。(9) しかし、この地に激しい飢饉が起こったので、アブラムはエジプトにしばらく滞在しようとした。

雨量の少ない(そしてこの時は飢饉でありほとんど雨が降らなかった)カナン地より、豊かなナイルの水に支えられていたエジプトの方が生活の基盤ははるかに安定していたであろう。しかし、ここには神に示されてとか、神に祈った結果、そのように導かれたということは書かれていない。つまりアブラムは自分の判断でエジプトに行こうとしたのである。どこに行くのも彼の自由であったかもしれないが、その前に彼は主なる神に祈るべきではなかったか。このカナン地に導き入れてくださり、「あなたの子孫にこの地を与える」(7)と約束された主に飢饉のゆえの困難を打ち明けて、主の助け、主のあわれみにすがるべきではなかったか。しかし、彼はそのようにせず、自分の経験、自分の判断でエジプトに行ってしばらく滞在しようとしたのであった。

[11-13]「彼がエジプトに近づいて、その地に入って行こうとしたとき、妻のサライに言った。『聞いてほしい。私には、あなたが見目麗しい女だということがよく分かっている。エジプト人があなたを見るようになると、「この女は彼の妻だ」と言って、私を殺し、あなたを生かしておくだろう。私の妹だと言ってほしい。そうすれば、あなたのゆえに事がうまく運び、あなたのおかげで私は生き延びられるだろう』」

これはアブラムが考え出した生きるための知恵であったが、神から与えられた知恵ではなかった。

(20:12によれば、サライはアブラムの異母妹。しかし、夫であることを隠すのは偽りである)

[14]「アブラムがエジプトにやって来たとき、エジプト人はサライを見て、非常に美しい

と思った」

ノアの洪水後、人間の寿命は徐々に短くなってきていたが、それでも当時は今よりも人が長生きでき、老化のスピードもそれほどではなかったと思われる。この時、アブラム75歳、サライ65歳(12:4,17:17)

[15]「ファラオの高官たちが彼女を見て、ファラオに彼女を薦めたので、サライはファラオの宮廷に召し入れられた」

エジプトに入るとアブラムが予想していたことと予想していなかったことが起こった。エジプトの高官たちはサライが美人であることを認め、アブラムに同意を求めることなく、彼女をエジプトの王ファラオに推奨し、彼女はファラオの宮廷に召し入れられてしまったのである。彼女はファラオの権威のもとに置かれてしまい、アブラムはもはや彼女の安全についてさえどうにもできない無力な立場に追いやられてしまった。

[16]「アブラムにとって、物事は彼女のゆえにうまく運んだ。それで彼は、羊の群れ、牛の群れ、ろば、それに男奴隷と女奴隷、雌ろば、らくだを所有するようになった」

アブラムにとって物事が思いどおりうまく運ぶように見えたが、それはまた彼が妻を失うことの決定的なしるしともなってしまった。アブラムは自分に降りかかろうとするわざわいを自分の知恵を用いて逃れようとしたが、かえってそれが別のわざわいをもたらすこととなった。もし彼がサライを自分の妻であるとはっきり言っていたなら、高官たちもアブラムに手を出さず、サライもファラオに推奨されなかったかもしれない。また、もしアブラムがカナンの地にとどまって主に祈り、主にすがって熱心に導きを求めていたなら別の展開があったかもしれない。主は何もない荒野でイスラエルの民を四十年も養うことのできるお方なのである。→出エジプト記、民数記、申命記参照

カナンの地に導かれたのも、飢饉を来たさせたのも主の御計画の中にあっただのならば、その困難を解決することも主はおできになるはずである。しかし、アブラムはまだそこまで信仰を働かせることはできなかった。そして彼が自分の知恵で行動したことの結果がこれであった。

しかし、すべてことを働かせて益としてくださる主がここで行動に移られた。主はアブラムの弱さも愚かさもよく御存じで、彼が失敗した、信仰を働かせなかったと見て捨てるようなお方ではない。

[17]「しかし、主はアブラムの妻サライのことで、ファラオとその宮廷を大きなわざわいで打たれた」

これはアブラムの取った行動に対する主のさばきの現れであると同時に、彼へのあわれみのしるしでもあった。彼は自ら取った行動の結果、多くの人を巻き込んでしまった。

「ファラオとその宮廷」とはファラオとその家族、使用人、家来、その他家畜なども含まれるであろう。「大きなわざわい」とは病気や自然災害などによるものであったと考えられる。

[18-19]「そこで、ファラオはアブラムを呼び寄せて言った。『あなたは私に何というこ

とをしたのか。彼女があなたの妻であることを、なぜ私に告げなかったのか。なぜ「わたしの妹です」と言ったのか。だから、私は彼女を自分の妻として召し入れたのだ。さあ今、あなたの妻を連れて、立ち去るがよい。』」

ファラオがどのようにして自分たちが受けたわざわいの原因を知ったのかわからないが、すべてこれらのわざわいはサライを宮廷に召し入れたことから起こったことだと気がついたのであろう。しかし、そのように気がつくことも主の働きであった。さらにファラオが詳しく調べさせると、サライはアブラムの妻であるということがわかった。それで彼はアブラムを呼び寄せて怒りを発したのである。

彼はアブラムの不誠実を責め、サライを連れて立ち去るように言った。彼はアブラムに危害を加えることができたが、サライを召し入れたことがこのようなわざわいをもたらしたのなら、彼女を宮廷にとどめることや、アブラムを手荒く扱ったり危害を加えたりすることでさらに激しいわざわいがあるのではないかと考えたのであろう。

[20]「ファラオがアブラムについて家来に命じたので、彼らは彼を、妻と、所有するすべてのものと一緒に送り出した」

ファラオがこのようにしてアブラムと妻サライとその一行をエジプトから送り出したということは、何らかの意味で彼がアブラムの信じる神の干渉を感じたからではないか。エジプトにはたくさんの偶像の神々があったが、それらとは違うアブラムとともにおられる力ある神の存在を彼は感じたのであろう。

人間の知恵の尽きる時、そこになお主なる神の導きの御手がある。アブラムはカナンの地の飢饉という試練に信仰を持って対処せず、自分の知恵で行動した。その結果、妻のサライを非常な窮地と危険に陥れ、自らはファラオによってその不誠実を責められ、神を信じる者としての面目丸つぶれであった。しかし、それでもなお主はアブラムを見捨てず、彼とその妻と一族を危険から救い出された。これは主のあわれみと恵み以外の何ものでもない。

このようにして主はなおもアブラムを導いていかれる。そしてアブラムもこのような様々な失敗や経験を通して自分の弱さや罪深さを知り、そしてまた彼の信じる主なる神がいかに偉大なお方で、頼りがいがあり、愛とあわれみに富んでおられるお方であるかということを知り、その信仰を成長させていくのである。私たちも同じ主を信じる信仰者として、ここから教訓を学ばなければならない。